
 記 事

例会記録

日本医史学会 11 月例会

令和2年11月28日(土)

順天堂大学10号館105カンファレンスルーム

(オンライン)

- 第25回富士川游学術奨励賞 受賞記念講演
江戸時代の経穴学にみる考証と折衷
——小坂元祐と山崎宗運を事例に 加畑聡子
- スペインかぜ流行とわが国の衛生行政
——内務省衛生局『流行性感冒予防心得』と
大日本私立衛生会『予防注意書』の比較を中
心に—— 逢見憲一

 日本医史学会・日本薬史学会・日本獣医史学会・
日本歯科医史学会・日本看護歴史学会・洋学史学
会 合同12月例会

中 止

日本医史学会 1 月例会

令和3年1月23日(土)

(オンライン)

- 歴史学と文学との関係についての一考察
西巻明彦

例会抄録

翻訳者フナインと『医学問答集』：イスラーム医学の形成

矢口 直英

イスラーム世界の医学の歴史は9世紀に始まる。アッバース朝の初期に当たるこの時代に周囲の文明への関心が高まり、様々な文献がアラビア語に翻訳されていった。医学ではフナイン・ブン・イスハーク(873年没)と彼が率いる翻訳者集団が、ガレノスの著作を中心にギリシアの医学文献を翻訳した。彼らの活動の結果、当時既に失われていたものを除いて、ガレノスの著作の大半がアラビア語で読めるようになり、その後の時代における医学の発展の基礎が築かれた。

ガレノスの著作が中心となったのは、イスラーム勃興以前の中東や地中海世界においてガレノスの医学が支配的な影響力をもっていたからである。古代末期、5世紀から6世紀ごろには、エジプトのアレクサンドリアが医学教育の中心地となっていた。そこではガレノスの著作の要約書が

作られていた。また別に、ガレノスの著作に基づいて「アレクサンドリア集成」と呼ばれる翻案が作成されていた。これはアラビア語版のみが現存するが、その写本にはフナインによって翻訳されたという情報があるため、ギリシア語で編集されていた可能性がある。このようにアレクサンドリアではガレノスの著作が広く研究されていたが、アラビア語の伝承によれば、数多いガレノスの著作の全てが研究されていたわけではなく、一部のものに限定されていた。それらはガレノスの「十六書」と呼ばれる著作群として伝わり、アレクサンドリア集成についても同一のタイトルが纏められた写本が残されている。十六書は、イブン・ナディーム(990/995/998年没)の『書誌目録』によれば、『学派について』、『医術』、『初心者のための脈拍について』、『グラウコンへの治療法につい

て』、『初心者のための解剖について』(=『骨について』、『筋肉について』、『神経について』、『静脈と動脈について』)、『ヒポクラテスによる元素について』、『混質について』、『自然の諸機能について』、『原因と症状について』(=『病気の種類について』、『病気の原因について』、『症状の差異について』、『症状の原因について』)、『罹患した部位について』、『脈拍について』(=『脈拍の差異について』、『脈診について』、『脈拍の原因について』)、『脈拍の予後について』、『発熱の種類について』、『分利について』、『分利の日について』、『治療法について』、『健康維持について』から構成される。しかし、十六書としてこれら以外のタイトルを挙げる人物がいること、またフナイン自身が『健康維持について』を除くものをアレクサンドリアの必修書として証言していることから、これらのタイトルに学習が限定されていたという説には疑問が残る。この疑いはフナインの著作『医学問答集』からも指摘できる。

『医学問答集』は問答形式によって医者に必要な知識を述べる入門書であり、後代の注釈者による区分では10章から成る。この著作はフナインの生前に完成せず、弟子のフバイシュによる増補がなされて、今のかたちで伝わる。その増補が始まる箇所について異なる伝承があるが、内容や文体の分析から、第5章「医学の実践部分について」の半ばを境にして編集方針が変わっていることが分かる。第1章から第5章前半までは簡潔な問題と簡潔な回答の組み合わせから成り、その内容もアレクサンドリア集成のうち様々なタイトルに基づいている。一方第5章の後半では、回答部分が長い説明の文章となり、その内容はアレクサンド

リア集成の『グラウコンへ』1点に集中して見つかる。また第6章「単純および複合薬品について」はさらに回答の文章が長くなり、いくつかの問題では問われている事柄への回答に続いて異なる説明が続いている。例えば、第6章問18は内容的に3つの部分に分けられ、問いそのものへの回答は最初の部分にしかない。これらの部分はそれぞれガレノスの『単純薬品について』第1巻第13章から第14章、第1巻第17章、第4巻第15章に対応する文章が見つかるため、この問いの文脈はガレノスの記述を背景として生まれている。この問いの文章は内容だけでなく語法の点でもガレノスの文章に非常に近く、直接あるいは間接的にガレノスの著作を下地にしていると考えられる。『医学問答集』第6章の大部分は、ガレノスの『単純薬品について』第1巻と第4巻、また『薬品複合について(場所ごとに)』第1巻と第2巻に並行箇所を見出すことができる。第6章もまた第1章から第5章前半までとは編集方針が異なると言える。以上のことから、第5章前半まではフナイン自身の記述であり、第5章後半以降がフバイシュによる増補だと判断できる。これは『医学問答集』シリア語版の写本に記録された情報とも一致する。

学習向けに意図された『医学問答集』においてガレノスの薬品関係の著作に基づいた記述が見られることは、それらの著作が医学教育において重視されていたことを意味する。薬品関係の著作は十六書の別の伝承にも含まれており、このことを裏付けている。古代末期アレクサンドリアの医学教育の実態は改めて検討すべきであろう。

(令和2年10月例会)

「医は不仁の術」再考

——戦時と平和時、個別的倫理と集合的倫理——

津谷喜一郎

「医は不仁の術、務めて仁をなさんと欲す」は大分県中津の医師・大江雲澤(1822-1899)が述

べた「四則」の第一則だ。それは、当時また現代においてどのような意味を持つのであろうか？